学力問題と品川区の教育改革

若月秀夫

1．はじめに

教育をめぐっては，皆さんそれぞれの立場で「こうしろ，ああしろ」と言われるわけですが，どうも最終的には行政のところに全てが集約されて，「教育行政がこれこれしかじかであるからこうだ」というようなところに，結論が落ち着くように思われます。その意味で行政の方から，研究者の皆さん方にどれぐらいお役に立つお話ができるのかについては大変心許ないわけですが，いずれにしても行政は行政としての立場から，今考えていることを，そして研究者の方々の様々な提言をどういう風に活かしているかというようなことをお話できればと思っています。

2．学校選択制は目的ではなく手段

まず，今品川と言えばすぐに学校選択制といったようなことが話題になるかと思います。教育改革と言えば学校選択制といった，非常にステレオタイプな物の言い様が世間に流布されています。これはかなりマスコミの影響が強いのだと思います。さきほど学校選択の渦に巻き込まれる，というお話がありましたが，何となくそこには「迷惑なことになったなあ」というようなニュアンスが漂わないわけでもありません。しかし，冒頭に述べておきたいこととして，品川の場合には，学校選択制といったことそれ自体が目的ではないということであります。この辺りを間違えて，世間の方には受けとめられているということがあるようです。すなわち，学校選択制を取り入れて，学校教育に1つの刺激を与えようという自治体はかなり数多くあります。一昨日の朝日新聞で，23区だけに限定していましたが，学校選択制を取り入れた区がいくつになったということが大きく報道されていましたが，地方では更にいろんなところで実施がされているわけです。

しかし，学校選択制そのものが目的ではないということを，品川は最初から考えておりました。ところが，私の心配が半分当たってしまった現象がおきているのです。ある自治体の教育長さんからこの前このような相談がありました。「若月さん，学校選択制，うちでもやっとの思いで取り入れたけれど，全然学校が変わらないんだ。なぜなのか。品川はいろいろ変わってきているのに，どうしてうちは学校選択制を取り入れても変わらないのかね。どこがどういけないんだ」というような内容でした。これは学校選択制を「手段化」しているのか，学校選択制を「目的化」しているのか，その基本的な立場によって出てきた違いなのではないかと思っております。

それなりに説明を申し上げたわけでありますけれども，学校選択制という看板さえ掲げれば何となく教育改革の流れに乗っているというポーズを取ることができる，それは，それでいいのかもしれません。しかし，実質的に学校を変えていこうという時に，学校選択制そのものが目的化してしまうと，現場の校長先生方からどういう現象が起きるかというと，「しょうがない。うちの教育委員会も教育長が号令をかけて学校選択制を取り入れた。だけど聞くところによると品川も大分苦労して工夫して大変らしい」ということになる。

そこで，校長先生たちは，「わかりました。選択制やりましょう」と言いつつ，その実，「みんな，絶対に余計なことをしないようにしよう。今まで通りしっかり手をつないで同一歩調でやろう。自分で自分の首を締めることになるから。」口では，「学校選択制わかりました。選ばれる学校にしましょう」と言いつつ，みんな横睨みの横一線状態を維持する状況になるわけです。これは，学校選択制を目的化してしまった結果と考えられます。

品川はあくまでも学校選択制というのは一つの手段に過ぎないと捉えています。そして，本来の学校の1番の使命は子ども達の学力ですから，それをとにかく身に付けるために，もっともっと学校の今のあり様といったものを根本的に考え直すことこそが究極の目的であると考えています。たしかに，学校のあり様以外にも，指導方法の問題や指導内容の問題，指導体制の問題，また，校長の持つ権限の問題などの様々な問題があるでしょう。しかし，そういう中で，とにかく学

校という今までのあり方，あるいは今までの我々がよしとして疑ってこなかったアプリオリをもう１回疑ってかかり，１つ１つを確認し合いながら学校教育の新しいあり様を探していくこと，すなわち「学校の体質」，「教員の物の考え方」を転換することが目的なのです。

先ほどの小学校のご報告にもありましたが，指導体制の転換をする，あるいは，学級経営の中において担任と子どもとの固定化した人間関係というものをなるべくフレキシビリティに富んだ人間関係に変えるということを目指して，例えば，教科担任制や習熟度別を取り入れてみたり，様々な指導方法の例というものをメニューとして教育委員会の方から示すということさせていただいています。そのメニューの中の一つが，学校が選ばれる存在であるという学校選択制だったというだけのことなのです。

この辺りがどうも若干誤解をされて，学校選択制を取り入れれば黙っていても学校がオートマチックに変わっていくんだという風潮が最近出てきていることに危惧の念を持って見ております。あと，２，３年して，新聞に「学校選択制導入。されど，学校は動かず」というような記事が出たら嫌だなと今から想像しているのですが，品川の学校選択制の本来のコンセプトは，上述の通りであるということを，まずご理解をいただければと思っております。

３．学力観をめぐるギャップ

次に，学力に関してですが，学力をめぐっては，やれ低下している，してないだとかで，様々な数字が示されます。よく言われるように「数字は正直なり。されど数字は不正直なり」であります。議論に対してある意図的な光を当てれば，どういうものが浮かび上がってくるかということは容易に操作ができることです。したがって，行政を進めていく上で，特に数字は大事な判断材料になってくるがゆえに，それをいかに客観的に判断して，マジョリティをどう捉えていくか，その数字というものを解釈してどのように新しい政策に展開していくか，ここがある意味では大切なところでもあるわけです。

例えば学力をめぐっても，現在，学校そして教育委員会は大きなジレンマに遭遇しているというのがまぎれもない事実です。具体的には，旧来の，これは「固定的学力観」と呼んでいいのかわかりませんけれども，別の言い方をすれば定量的な測定ができる学力と言ったらいいでしょうか，そういった学力を強力に求めるのが地域であり，家庭なのです。親御さんは今なおそういった学力を強烈に学校に求めてきます。

特に中学校という段階になると，相当具体的な成果というものを学校に要求してくるというのがまぎれもない事実です。品川はその背景に学校選択制があります。そうなった時に，例えば，国の方から新しい学力観というのが提言されます。私は新しい学力観は大変すばらしい学力観であると思うし，否定するつもりはさらさらありません。むしろさらに拡大していきたいと思い，いろいろなメニューを揃えて，それをさらに普及していこうと考え，実際に学校もそのような努力をしているのです。

しかし，社会では一部の親御さんは，やはり，指導要領の言葉で言えば，「意欲・関心・態度」よりも定量的に測れるものを求めます。そのため，学校だけがその辺りの調和を保っていかなければならないというのが，公立学校の現実の姿です。この辺りのバランスをどのように取っていくか，すなわち，教育の専門家である我々教師が，「でもこれから必要なのはこれなんだから」ということを，何とか保護者や社会に訴えてわかっていただきながら，なおかつ当面の親御さんの要求にも応えるという，非常に大変な問題を今学校は抱えているということなのです。

この意味から，教育委員会の立場から見ていますと，小学校における学力観と中学校における学力観がかなり乖離しているような気がしてしまいます。小学校に関しては，品川の場合も，先ほどの大阪の小学校ほどまできめの細かいところまではいってないですが，一生懸命基礎学力はやりつつも，やはり意欲とか関心を大事にしようと取り組んでいます。

また，先日の市川先生のお話をうかがって，学習動機も大事だと思ったのですが，そのようなものをなるべく大事にしようという雰囲気は小学校では非常に強いと思います。ですから，小学校の研究発表会のテーマを見ると，だいたい「いきいきとした何とか」だとか「自ら進んで何とか」のような情緒的なテーマが並んでいて，そういうものを一生懸命育てようという姿勢がわかります。ところが，中学校の先生から見ると，「あんなことよりも分数をしっかりやってくれよ」と現実の評価も出てくるわけです。

また，先日品川区で校長先生全員を対象に実施した学力をめぐるアンケートからは，様々な声が出ているのですが，その中でやはり，中学校の校長先生の小学校に対する強烈な要求が出てきています。「九九が言えない，足し算ができない，漢字が書けない，小学校

段階から教えるべきことを教えていない，結局中学校は小学校の勉強をもう１回やり直し，それが中学校の教育課程をどれくらい圧迫しているか」というようなことがかなり明確に出ていました。そのような意味で，小学校の先生達が育てようとしているものと中学校がそれを引継ぎで要求している学力といったようなものの間に，非常に大きなギャップが出てきているわけです。

４．混沌の中の現実的な取り組み

このように混沌とした中で，やれ学力がどうのこうのとこう言っても始まらないと感じます。小学校文化，中学校文化，これは全く異質の世界です。その異質の世界の中に学力をめぐる考え方も全く異質のものでありますので，その辺りをもう少しなだらかにしていこうということで今，学力といったものの定着をかなり意識して，いわゆる法的にはできませんが，実質的な小中一貫校，９年間通した小中一貫校の構想を盛んに進めているところです。

どうも最近，ピアジェの言う発達の状況と現実の子ども達の様子を見ると若干ずれが出てきている。また，エリクソンやハビーガーストの理論も少しずつずれてきているような感じがする。そこでこの前，市川先生からうかがった学習動機という視点を取り入れて，その辺りをもう１回見直した新しいカリキュラムの学校を作っていきたい。そしてその中でこれから本当に求められるいわゆる学力と本当の意味でのこれから要求される学力を子ども達の上に位置付けさせてあげられればいいなと考えて，取り組んでおります。

それから品川の場合には，学力調査というのを今年度品川独自でやります。問題はそろそろできたようです。ある民間企業とうちの校長先生方が何人かで協力して問題作成を行い，定量的な学力の測定だけではなく，いわゆる定性的な部分での評価ができるテストというものができ上がりました。それを１月になりましたら，小学校６年と中学校２年生を対象に実施をする予定になっています。

なお，先ほど志水先生の方からもありましたけれども，学校間格差という課題がよく話題になります。格差に関しては確かにそういう部分もあるでしょう。しかし，私達行政はそんな大げさなというと失礼かもしれませんが，それ以前に現実に今学校の中にある様々な格差というもの，指導力の格差や教員の意識の格差などから埋めていかない限りどうにもならないだろうということで取り組みをしている最中であります。

本論文は，2002 年度公開シンポジウム（2002 年 12 月 7 日）に話題提供され、学校臨床総合教育研究センター年報『ネットワーク第 5 号』（印刷中）に掲載されたものである。